

another eye

ラップ魂、健在なり

70年代後半にニューヨークで生まれたラップ音楽。四半世紀が経ち、今では音楽シーンの主流としてゆるぎない位置を占めている。ズボンが腰からずり落ちた刑務所スタイルに、大きな飾りのついた通称プリンプリンのネックレス。小学生にまでそんなヒップホップスタイルが浸透している。昨今は、人気ラッパーの派手な金遣いやファッションだけが話題になりがちだが、ラップ音楽は、抑圧された社会層の表現手段として生まれた。今もその真髄は変わらない。人種や文化の壁を超え、ニューヨークの街角で生き続けるラップ音楽をめぐる2組の異なった生き方を紹介する。



Notorious MSG

ノトリアス“悪名高き”MSG

NYのチャイナタウンで結成されたラップバンド。メンバーは、ホンコン・フィーバー、ダウン・ローメン、フナン・ポンプの3人のアジア系移民者。2004年「Die Hungry」でアルバムデビュー。Chinatown Hustler、Dim Sum Girlなどの曲を含んだEP、「Lunch Money」に続き、「Fingers of Revenge」が発売予定。チャイナタウンをベースにアメリカ各地へと活動を広げている。



<http://www.notoriousmsg.com/>

チャイナタウン・サバイバル・ガイド。箸やしょうゆ、中華フライパンをどのように武器に使うかなどのガイド。「ユーモアをもって真剣なメッセージを伝える」がモットー。



Chinatown Hustler、Dim Sum Girlなどのヒット曲を含んだ2枚目のEP「Lunch Money」。発売予定の3枚目のEP「Fingers of Revenge」は報復がテーマ。

ステレオタイプを打ち破る

中華街の移民者から生まれたラップ

「ゲットーで生きるのはちっとも楽しくねえ、俺達はチャイナタウン・ハスラーだ」。

ラップの軽快なリズムに乗り、チャイナタウンの薄暗い街角にパワフルな歌声が響き渡る。中華料理店のデリバリーボーイ(出前配達人)からラップバンドとしての成功をつかみはじめたアジア系移民者3人組、Notorious MSG (悪名高きMSG) だ。

「俺達はみんな10代半ばでニューヨークにやって来て、チャイナタウンで育った。同じような移民者は、中華料理店で働きながらアメリカンドリームを夢見るが、多くはキッチンで一生を終える。俺達はそんな一人にはなりたくなかった。バンドを組んで、

有名になりたいと思った。ラップという音楽を選んだのは、休憩の合間にいつも聴いていたこと、それに、金のない俺達には高価な楽器など買えず、声だけでは始めることのできるラップが最適だったからだ」

バンド名のMSGはグルタミン酸ナトリウムの略語で、いわゆる味の素。中華料理には欠かせないが、アメリカでは体に悪いと毛嫌いされている。

「中華料理テイクアウト（持ち帰り店）はアメリカのどんな都市にも浸透し、NYでも数ブロックごとに存在するほど人気なのに

メンバーの一人が出前中に射殺された。「テイクアウトへの強盗やデリバリーボーイの危害は日常茶飯」とバンドの顔は暗く沈む。彼らのビデオ「Chinatown Hustler」では、キッチンの仕事を終えたメンバーが革ジャンとサングラスに着替え、報復をもとめ、深夜のチャイナタウンを徘徊する。デリバリーボーイに横柄だったドラッグ売人の白人を射殺し、大きな体の黒人ギャングをノックアウトする。

「多くの中中華店で働く人を下流階級市民だと見なし、足元を見る。何をしても言い返せない弱い立場だと見下している。

俺達は彼らの声となり、戦い返したい。俺達がミュージシャンになるといっても最初は誰も相手にしてくれなかった。俺達が貧しいチャイナタウンのゲットー育ちだからだ。中華街の移民者でも中華店で働く以外のことができるんだということを証明したい」

ユニークであることが誇りだ

「どこにいても、他と変わっていると適応するのは難しい。俺達もそうだった。だからこそ、このバンドでは違いを祝おうという意図がある。アメリカにも多くの混乱しているアジア人がいる。どうやってアメリカ文化に適応

働く人や英語にアクセントのある人と距離を置くアジア人も多い。デリバリーボーイだった俺達にアジア系の代表となってほしくないという人もいる。だが、皆同じように、最初はNYに体一つでやってきた。俺達より前に移民して一生懸命働いてきた人のことも忘れてはいけない。どこで生まれ育とうとアジアの血が流れている限り、俺達は俺達の歴史の一部だ。無視はできない」

よく言えば、仕事熱心で我慢強い、悪く言えば、おとなしくて、退屈。そんなアジア人への偏見がはびこるアメリカで、アジア人ラッパーはまだ未知の存在だ。

「テキサスでコンサートをしたときもアジア人という外見に最初はとまどいを感じた客もいたようだ。だが、いったん音楽が始まり客が乗りだすと、人種の違いは消える。俺達みたいな社会のつまはじきは、どこにでもいる。周囲から理解されず、あまり期待もかけられていない。彼らは俺達の苦闘や反逆精神に共鳴してくれる。

俺達はラップ音楽で黒人に追いつこうなんて思っていない。彼らがブロンクスについて歌っても俺達にはピンとこない。俺達は自分達の体験をもとに、オリジナルなスタイルや音楽を作り上げていく。アジア人に抱かれているステレオタイプを打ち破りたい。音楽業界もアジア系にはまだ多くの差別が残る。適応しない、新しいものが入ってくるとどう対処したらよいかわからないのだ。俺達の道のりはこれからも長いけど、俺達の後に出てくるアジア系バンドのためにも、少しでもドアを開けて、音楽業界に多種多様なシーンを作る上げることができたら、俺達にとっては成功だ」

マッシュルームカットやおばさんパーマのヘアスタイルも、オーバーザトップとしかいいようのない大げさな演技も、彼らのトレードマーク。ファンにはそんなコミカルな一面がバカ受けする。「100%まじだったら、これほど人気はでないのかも」と彼らも納得する。

「ユーモアの中に真実を織り込む。笑いがないと、人は正直にはなれないものだからね。客にまず楽しんでもらって、俺達も楽しいときを過ごす。女の子にももてたいからね」

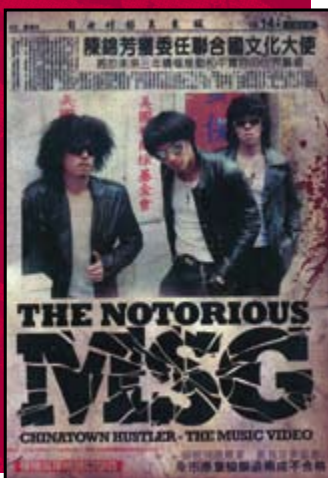


写真右上：「中華街で働く人の歌なんか今までなかった。デリバリーボーイも人間で、彼らにも夢がある。そんな声のない人の声になりたい」とホンコン・フィーバー。



写真中：Notorious MSGのメンバー。(左から)好青年ダウン・ローメン、リーダーで作詞作曲を担当するホンコン・フィーバー（香港熱）、寡黙なファン・ボンブ（湖南省の爆弾）。

写真右下：Notorious MSGのDVD。中にはチャイナタウンの子供達の前でチャリティー活動する様子もある。「アメリカで育つアジア人の子供達にはロールモデルがない。俺達みたいなバンドも一つの生き方だと感じてくれたら嬉しい」。



もかわからず、働いている人には少しの尊敬もない。同様に、MSGも中華料理だけではなく多くの料理に愛用されているにもかかわらず、蔑まれている」

そんな相似が気に入ったという。

最初のEPの録音終了後、オリジナル

していくのか。どうすれば受け入れられるのか。俺達も学校の弁当には中華料理は入れないなど、自分のアジア性を隠した時期もあった。今は自分達を誇りにしている。アジアから受け継いだ歴史、文化を誇りに思う。ルックスがいいとか、金持ちだというだけで主流社会にちやほやされ、中華店で

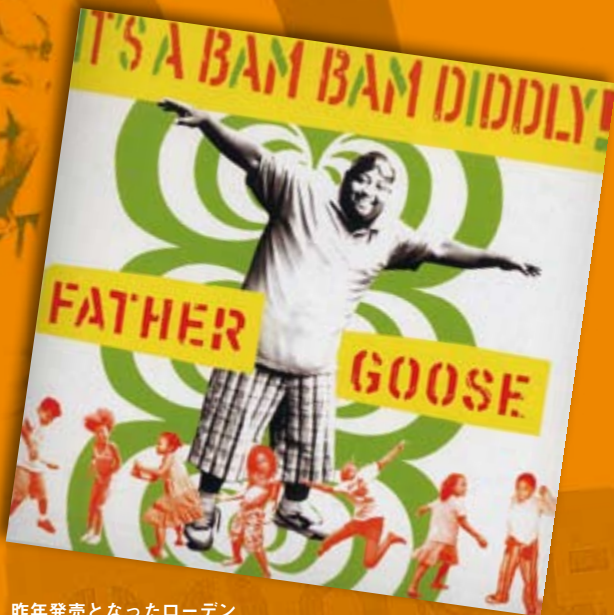
Wayne Rhoden

ウエイン・ローデン

ジャマイカ出身、ブルックリン育ち。ダンスホールのDJとして音楽に携わり始める。90年代、Rankin Donという名前のラッパーとしてデビュー。「Baddest DJ」などのヒット曲がある。2000年、子供向け音楽家、ダン・ザーンズのCDにファザーグース (Father Goose) として参加。以来、ザーンズさんのツアーやテレビ番組に参加し、子供達の人気者となる。昨年、初のソロアルバム、「IT'S A BAM BAM DIDDLY!」を発表。サテライトラジオで1位、ビルボード・レゲエ部門で7位。「両親が推薦する子供の歌」にも選ばれた。



ファザーグースことウエイン・ローデンさん。



昨年発売となったローデンさんのソロアルバム、「IT'S A BAM BAM DIDDLY!」。8歳になる娘さんや一緒に暮らすお母さんの歌声だけではなく、シェリル・クローウといった大物歌手もゲスト参加。「お金の話をしなくてもやりたいことを話せばすぐに協力してくれる友人達がたくさんいて、恵まれている」とローデンさん。

ラッパーから子供に愛されるファザーグースへ



音楽があった
私はラッキー
だった

子供達との歌のレコーディングに行けなくなったマザーグース。しかたなくケーキ好きのファザーグースを代わりに送ると、子供達とラップリズムで歌い始める。子供向け音楽家、ダン・ザーンズさんが2000年に制作したCDの中の1曲で、歌っているのはウエイン・ローデンさん。このCDは大ヒットとなり、以来、ローデンさんはファ

ザーグースとして子供達の人気者となり、ザーンズさんのツアーやテレビ番組には欠かせない存在となった。

今でこそ、子供達にはラップのうまいファザーグースとして知られるローデンさんだが、90年代は、ハードコア・ラッパーとして名の通った存在だった。

家族の写真に囲まれた部屋で、大きな体をゆったりとソファに沈ませて、ローデンさんは過去を振り返った。ジャマイカ生まれの彼が、ニューヨークのブルックリンに移り住んだのは15歳のとき。1980年代の当時はクラックと呼ばれる麻薬が蔓延していた頃だ。

「当時はドラッグや銃があちこちで売られていた。裕福な地域から客がここのまで買いに来たんだ。新しい車や流行の服などを着て練り歩くドラッグディーラーは、10代半ばの子供にとっては大きな誘惑だった。安全な家から一歩外へ出ると、ギャングメンバーが近寄ってきて、『お前はどこの組の者だ』と聞いてくる。私はなるべく自分の世界に閉じこもり、大好きな音楽に身を浸した。それでも誘いは止ま

らない。そこで、近所のギャングメンバーをみんな招待してダンスパーティを主催した。そこでやっと彼らは、私が音楽に夢中で、ギャングなどには興味がないと理解してくれた。音楽好きの彼らのために、毎週末、私はパーティを行なうようにした。最初は違った組間での喧嘩が始まりクレイジーとしかいいようがなかった。でも、そのうちに、私のパーティでは平和に音楽を楽しむことが大切だと悟ってくれた」

90年初め、ダンスホールのDJからRankin Donという名のラッパーとしてデビュー。

「ラップ音楽は、主流社会から分離された貧困の中で生きる自分を表現するための手段だ。仕事やあらゆることで選択のない限られた地域で育つと、自分で何かをやるうと奮起しても、システムが邪魔をしていると感じる。ラップは、ギャング闘争や警察官への攻撃を賞賛していると非難されるが、どの立場から見ると違って来る。家から一歩出るとギャングが二人寄ってきて、どちらを選ぶかと迫ってくる。それが私の人生だった。街角でいきなり警察官に取り押さえられるのも日常

90年代は、Rankin Donという名前のラッパーだったローデンさん。「Real McCoy」や「Baddest DJ」などのヒットがある。「天気の良い日は、仲間のラッパーと街角でよくMCバトルしたものだ」



茶飯事のことだ。音楽があった私はラッキーだったが、多くの子供達には助けがない]

彼のヒット曲も銃や暴力を称える歌詞に満ちている。

「ラッパーとして成功するためには、ギャングメンバーが聞きたがる歌を歌わなければならない。『俺はタフだ。ふざけんよ』ってね。とにかく生き抜いていこうと懸命だった」



子供に戻ったラッパー

子供向け音楽を始めるきっかけとなったザーンズさんとの出会いは、ザーンズさん宅のベビーシッターをしていたローデンさんの母親の引き合わせによるもの。当時はラッパーとしてのヒットも途切れ、

将来を見失っていたころだ。

「自分で常に意欲を持ち続けるのは難しい。ずっと何も起こらないと何の為に戦っているのかを見失ってしまう。それでも、私を信じて、励ましてくれる人達がいて幸せだった」

2000年以降、子供向けラッパーファザーグースに「変身」したローデンさんだが、昨年の暮れ、さらに彼の新境地がリスナーの許に届けられた。念願の初のソロアルバム「IT'S A BAM BAM DIDDLY!」が発売されたのだ。ジャマイカでの子供時代の思い出の曲をベースに、フォーク、ソウル、ラップ、ファンクを取り混ぜ、カリビアン風にアレンジされている。ハードコア・ラッパーからファザーグースへの転身に眉をひそめる友人もいるなか、彼はほっと胸をなでおろしている。

「子供のための音楽を歌うことで、本来の自分に戻れたような気がする。ラッパー

時代は一緒にいる連中によってコメディアンになったり、ギャングスターになったりと自分をうまく変えていた。でも、今、子供達の前で自分も子供として振る舞えてなんと楽しいことか。ジャマイカで過ごした楽しい子供時代を再現しているようだ。何の演技もしなくていい。自分のままでいられるのがいい」。

これからのファザーグースの目標は「子供の歌をもっとヒップなものにすること。ブルックリンやジャマイカの子供達に、暴力肯定のラップ音楽に代わる音楽を聞かせたい」と意欲を語る。

Text by : Jun Moto



「私の音楽好きは母から受け継いだもの。ジャマイカでの子供時代は母の影響で一日中歌っていた」。ファザーグースへの転身のきっかけとなったザーンズさんとの出会いも、ローデンさんの母親がとりもつたもの。今でも母親には頭が上がらない。

「子供音楽をもっとヒップなものにしたい。家族みんなが参加して、踊りだしてもらいたい。世界中の人が一つになる音楽をつくりたい」

